

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：17701

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00441

研究課題名（和文）ハーマン・メルヴィル『クラレル』における宗教性の再解釈

研究課題名（英文）Reconsidering Religious Faith in Herman Melville's Clarel

研究代表者

竹内 勝徳（Takeuchi, Katsunori）

鹿児島大学・法文教育学域法文学系・教授

研究者番号：40253918

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：まず、2020年に単著『メルヴィル文学における＜演技する主体＞』を出版し、所収の『クラレル』論において、近代の基督教の危機や、アングロ・サクソン系民族による植民地主義や帝国主義、そして、そうしたアメリカ例外主義と連動して進行した政治的なシオニズムが提示されていることを明らかにした。また、2022年に発表した「メルヴィル小説におけるミレニアリズムと労働」では、『クラレル』の中で展開するミレニアリズムの発生過程を辿り、特に巡回説教師からの影響が大きかったこと、また、ミレニアリズムが世界主義的（Cosmopolitan）に変質していったことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代においてもイスラエル建国の是非が問われ続けているが、それ以前の歴史や文化を含めてこの問題を捉えることは少なかったように思える。本研究はメルヴィルの『クラレル』という作品に焦点を当て、ミレニアリズムと連動したシオニズムの発展やそれに対する多面的な見方を提示できたと考える。ウィリアム・V・スパノスは、ピューリタニズムという宗教的枠組みによって新大陸に建国されたアメリカが、マニフェスト・デスティニーやミレニアリズムの言説を用いて領土拡大に邁進した歴史と、ユダヤ人のために国家を建国したシオニズムの動きに必然的な合流点を認めている。その考え方をより具体的に論証したつもりである。

研究成果の概要（英文）："Zionism and Transcend of Time in Clarel" in The Performing Subject in Herman Melville's Works: Literary Creation as Spiritual / Textual Resurrection published in 2020 points out descriptions through the characters of crisis of modern Christianity, criticism against colonialism and imperialism deployed by Anglo-Saxon countries, and political views on development of zionism which has been commensurate with dangerous and greedy states of exceptionalism. "Herman Melville and His Laborers under the Shadow of Millennialism" demonstrates the origin and progress of millennialism, with focus on the influence of evangelists including Lorenzo Dow. Especially it clarifies how millennialism transformed into a tenet with Cosmopolitan aspects.

研究分野：American Literature

キーワード：メルヴィル ミレニアリズム シオニズム

1. 研究開始当初の背景

『クラレル』は150のカントから成り、詩行の総数は18000行にのぼる。メルヴィル作品の中でもきわめて難解なものとして、物語内では夥しい数のキャラクターが宗教について、人間の魂について、世界の行方について延々と意見を戦わせる。パレスチナを舞台とするこの掴みどころのない作品には、唯一、主人公クラレルのユダヤ人女性ルツに対する恋愛という一貫した筋が存在する。ルツの父親はアメリカ人でありながらユダヤ教に改宗し、パレスチナに移住した男、ネイサンである。つまり、<シオニズムに賛同するアメリカ人>という重大なテーマが含まれているのである。加えて、この作品には、キリストの復活や人間の救いという、メルヴィルが一貫して探求してきたミレニアリズムのテーマがはっきりと表れている。また、それに絡んで西洋と東洋にわたる多様な信仰のあり方が提起される。

周知のように、ユダヤ系移民はアメリカの民主的土壌を利して、植民地時代から19世紀にかけて着実に定着し、19世紀末には、テオドール・ヘルツルら有力なシオニストが、アメリカ人の愛国心に同化する傾向を高めた。20世紀に入ると、ハイム・アズリエル・ヴァイツマンやアーサー・ジェイムズ・バルフォアらの動きにより、実質的にアメリカがイスラエル建国に向けて協力する展開となる。ウィリアム・V・スパノスは、ピューリタニズムという宗教的枠組みによって新大陸に建国されたアメリカが、マニフェスト・デスティニーやミレニアリズムの言説を用いて領土拡大に邁進した歴史と、ユダヤ人のために国家を建国したシオニズムの動きに必然的な合流点を認めている(「エドワード・サイードとシオニズム」)。かつてのジョージ・W・ブッシュ政権に鑑みれば、現代でも、ミレニアリズムはアメリカの国家安全保障を支える重要な言説として機能していると言える。

メルヴィルも『クラレル』の中で、ミレニアリズムに導かれてキリスト教の救いを求めていた国民が、なぜシオニズムに合流し、新たな領土を獲得するナショナリズムに結びつくのかという深い疑問を表現した。これはミレニアリズムやシオニズムを通して国家の起源と本質、そしてキリスト教の根源的意義を問う試みであった。本研究は、これまで注目されていなかった『クラレル』とメルヴィル初期作品の関連性、並びに、キリスト教とシオニズムの国境を越えた相互作用を念頭に置いて『クラレル』を捉え直すものである。

2. 研究の目的

これまでのメルヴィル研究において、サクヴァン・バーコビッチが『白鯨』にミレニアリズムの終末的想像力を読み取り、ヒルトン・オベンジンジャーが19世紀後半のシオニズムの動きに注目したが、メルヴィル作品全体としてミレニアリズムとシオニズムがどう関わり、また、それが『クラレル』に結実したときに、世界的な政治的・宗教的潮流の中でどのように位置付けられるのかという議論はなかった。特に、政治や宗教に懐疑を示すメルヴィルが、ミレニアリズムを警戒しながら、そのレトリックを多用した理由はこれまで検証されなかったし、19世紀アメリカ文学を通じて、キリスト教とユダヤ教、ミレニアリズム、シオニズムの連動性、並びに、その国境と世紀をまたいだ展開に焦点を当てた研究は見当たらない。本研究は、以上の観点から、アメリカの建国神話からイスラエル建国や現代の安全保障に至る長期的なパースペクティブに立脚して、具体的に次の目的を実現するものとする。

(1) 19世紀におけるプロテスタント各派、カトリック、新興宗教、そしてそれらとミレニアリズム、シオニズムとの関りについて、宗教的・社会的背景を明らかにする。特に、メルヴィルの母方の家系が所属したオランダ改革協会とミレニアリズムの関わりについて調査する。(2) メルヴィル作品全体を通して、キリストの復活や人類の統合、普遍言語の発生など、ミレニアリズムのレトリックを分析し、それがいかにして『クラレル』に結実したのかを明らかにする。同時に『クラレル』のテキスト全体を詳細に分析する。(3) 同時代の小説家、ナサニエル・ホーソーン、ジョージ・リパード、マーク・トウェインらの作品を読解することで、ミレニアリズムとシオニズムが、作家たちのいかなる想像力を喚起したのかを調査する。それによって『クラレル』の独自性を検証すると共に、アメリカン・ルネサンスとそれ以後を分断しがちな文学キャンソンの再編を試みる。(4) アメリカ建国からミレニアリズム言説、マニフェスト・デスティニー、そして、その延長としてのシオニズムとイスラエル建国、現代の安全保障までの歴史的繋がりを明確化し、その中でメルヴィルの作品、特に『クラレル』にどのような批判力が込められているかを読み解く。

3. 研究の方法

(1) 宗教的・社会的背景、(2) メルヴィル作品の分析、(3) 同時代の小説研究とキャンソンの再編、(4) 歴史研究の着眼点により、(A)文献調査、(B)実地調査、(C)コンテクスト研究の3つのアプローチを採った。着眼点ごとに渉猟した図書を読解した。ハーヴァード大学図書館で調査を行い、また、エルサレムにて実地調査を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大により、海外での調査は全て中止となった。ポイントとなるのは、レノルズやジャイルズの研究を取り入れる点であり、彼らの研究によって大衆を扇動したスピリチュアリズムにおけるミレ

ニアリズムの位置付けや、カトリックとプロテスタントの文化的対立を理解できた。

4. 研究成果

まず、2020年に単調『メルヴィル文学における〈演技する主体〉』を出版し、所収の『クラレール』論において、ロルフや、モートメイン、アンガーらの視点によって、近代のキリスト教の危機や、アングロ・サクソン系民族による植民地主義や帝国主義、さらには、アメリカに代表される民主主義の暴走などが徹底的に批判され、そして、そうしたアメリカ例外主義と連動して進行する政治的なシオニズムがネイサンの姿を通して提示されていることを明らかにした。物語冒頭では、ユダヤ教がキリスト教の模範として挙げられることもあったが、むしろ、登場人物たちの議論は、そうした特定の宗教の隘路に落ち込むのではなく、宗教の多様性を認めたいうえで、つまり、教義とは別枠の「技法」や「表象」を活性化して、あるいは、仮面劇の際のドゥルーズ派の案内係とモートメインの発声のように、それぞれの教義は侵害しない形で、互いが共存する方向を向いていた。その意味では、ロルフはカトリックを一つの模範としていたし、アンガーもカトリックの系統にあった。しかし、ダーウエントはカトリック教会のあり方に異を唱え、アンガーもロルフの理論を「それならば、聖母は夢に過ぎない」(4. 18. 94)と一蹴していた。つまり、この作品において、近代国家の危機的な状況が提起され、それに対する様々な解決策が投げかけられる。そして、例えば、ロルフの過去から未来へ再生される物語の力や仮面劇における演劇の力、そして、マル・サバ修道院の空間配置などと、アメリカ例外主義の弊害やシオニズムが対立的に構造化されているのだが、では、ロルフの構想が統一的な解決策になるかと言うと、物語の中ではそうはなっていないのである。近代国家の危機とそれに対する解決策が構造的に提示はされるが、その解決策は統一されない、とういことが分かった。

また、2022年に発表した「メルヴィル小説におけるミレニアリズムと労働」では、『クラレール』の中で展開するミレニアリズムの発生過程を辿り、特に巡回説教師からの影響が大きかったこと、また、ミレニアリズムが世界主義的(Cosmopolitan)に変質していったことを明らかにした。ミレニアリズムを研究する複数の歴史学者がメルヴィルの『ホワイト・ジャケット』(1850)の一節を引用して、これはミレニアリズムの典型であると述べているが、メルヴィルが扱うミレニアリズム言説は、国境を超えた労働者の拡散を訴える場合が多く、これはジョン・ブライアントが長年研究してきた巡回説教師ローレンツォ・ダウからの影響によるものと考えられる。それはあるときは「マニフェスト・デスティニー」に連結するものとして批判され、あるときはマイノリティ文化の独自性に向かう要素として称賛される。メルヴィル文学がそのせめぎ合いの中で生成してきたことを明らかにした。

これらの研究成果は2024年9月末に出版予定の編著『アメリカ文学における終末論的想像力(仮)』において、さらに深く、包括的に探求する予定である。アメリカ文学の歴史はその植民地時代を含めて、ミレニアリズムやアメリカ例外主義と絡み合い、また、それらに立ち向かってきた。アメリカ例外主義とは、アメリカは神に選ばれた自由と民主主義を標榜する、大洋に挟まれた例外的な近代国家であり、世界の民主化を主導する義務があるという考え方である。それはプロテスタントの教義によって強化され、国家の根幹をなし、ミレニアリズム的終末を演じることで、アメリカを帝国化してきたと言える。マサチューセッツ植民地の形成から、独立戦争、メキシコ戦争、そして、南北戦争と、世界の終末を思わせるレトリックで政治家や説教師、ジャーナリストらが差し迫った危機を語り、国民の団結を呼びかけていった。20世紀以降も、二つの世界大戦に、大恐慌、ベトナム戦争、そして、9・11の攻撃、イラク戦争など、大きな危機に遭遇するごとに、民主主義の伝播、善と悪の戦い、対テロの戦いなど、多くの言説が用いられ国民を方向付けていた。現代においてこの終末論的想像力は、第3次世界大戦という用語により、世界中に拡散していると言えるし、我々はこの戦争のプロパガンダにさらされている。本書は、アメリカが体験してきた危機的状況の中で、不安や恐怖、それらの克服のプロセスを、作家がいかに描いてきたのかを読み解き、併せて、そうした危機的状況やそれに乗じた終末論的プロパガンダ、あるいは、それと絡み合うアメリカ例外主義の展開と分裂などを視野に入れて、アメリカの文学作品がいかなる意義を生成してきたのかを読み取るものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 竹内勝徳	4. 巻 10
2. 論文標題 メルヴィル小説におけるミレニアリズムと労働	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Sky-Hawk	6. 最初と最後の頁 5-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 竹内勝徳	4. 巻 90
2. 論文標題 「ラバチーニの娘」における思考と情念—ダークエコロジーを参照点として—	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 人文学科論集	6. 最初と最後の頁 45-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 竹内勝徳	4. 巻 -
2. 論文標題 労働の拡散を眺めるメルヴィル	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本英文学会第93回大会Proceedings	6. 最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 竹内勝徳	4. 巻 -
2. 論文標題 Paul Giles--- トランスナショナリズムからグローバリゼーションを超えて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 巽 孝之監修、下河辺 美知子・越智 博美・後藤 和彦・原田 範行編著『領域・脱構築・脱半球--- 二一世紀人文学のために』	6. 最初と最後の頁 518-521
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Katsunori Takeuchi	4. 巻 98
2. 論文標題 Michael Jonik, Herman Melville and the Politics of the Inhuman	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 英文學研究	6. 最初と最後の頁 104-112
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹内勝徳	4. 巻 -
2. 論文標題 Paul Giles---トランスナショナリズムからグローバリゼーションを超えて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 巽孝之退官論集 (仮名)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹内勝徳	4. 巻 -
2. 論文標題 Herman Melville and Politics of the Inhuman	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 英文学研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 竹内勝徳
2. 発表標題 ミレニアリズム的資本主義と人種問題　メルヴィル文学を通したウェーバー批判
3. 学会等名 日本ナサニエル・ホーソーン協会 第40回全国大会シンポジウム「アメリカン・ルネサンスと白人至上主義の構築」(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 竹内勝徳
2. 発表標題 ソローとトウェイン 口承文学の系譜
3. 学会等名 日本ソロー学会2022年度全国大会シンポジウムシンポジウム「ソローと19世紀の作家たち アメリカン・ルネサンスを再構築する」(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 竹内勝徳
2. 発表標題 Labor Diaspora/ Labor Mobility---アメリカ文学における移動と労働
3. 学会等名 日本英文学会第93回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 竹内勝徳
2. 発表標題 「ラバチーニの娘」における思考と情念
3. 学会等名 ナサニエル・ホーソーン協会九州支部シンポジウム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 竹内勝徳
2. 発表標題 Labor Diaspora/ Labor Mobility---アメリカ文学における移動と労働
3. 学会等名 日本英文学会大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------